

首里城跡出土銭貨の銭種構成について

Assemblage of Coin Types found in the Shuri Castle Site

長濱 健起

Nagahama Tatsuki

ABSTRACT: The Shuri Castle site has been excavated for over thirty years and a variety of artifacts and features have been reported. The classification and chronology of ceramics have dominated recent discussions, but the classification of coins is very difficult to carry out. In general, coins are believed to be easy to recognize in type and assemblage, however, there exist copy casts that make it difficult to use them as periodical markers. Therefore, this paper attempts to compile the entire corpus of coins excavated from Shuri Castle and to reconfirm the assemblages. Then, copy casts such as 'Kajiki' coins and Nagasaki trade coins are extracted for further analysis.

1. はじめに

首里城跡の発掘調査も沖縄県教育委員会が1974年に行って以来、すでに30年余が経過し、調査報告書も15冊以上が刊行された。その中で、最も注目されているのが中国産をはじめとする大量の輸入陶磁器である。この陶磁器に関しては、比較的充実した報告や論考もなされている。しかし、その重要性に比して、いまいち注目度の低い資料の一つに出土銭貨を挙げることができるが、この銭貨についても、近年は知念隆博氏が首里城跡出土の資料や県内の清朝銭などの検討を行っている。しかしながら、その論考では数量を提示した具体的な銭種構成の議論までは及んでいない。

そこで本稿では、いくつか可能な地域については未掲載資料も対象にすることで、より明確な集計を行い、首里城跡における現状での銭種構成および、他遺跡との比較・検討をする。また、その中で加治木銭や長崎貿易銭などの模鑄銭を抽出していくことで、若干の分析を試みる。なお、首里城跡の近隣に位置し、関連性のある遺跡の天界寺跡や円覚寺跡の出土銭も参考資料として扱っていく。

2. 首里城跡出土銭貨の銭種構成について

首里城跡からの出土銭貨は、西暦14年を初鑄年とする貨泉をはじめ、唐、北宋、南宋、金、元、明、清、朝鮮、琉球、米国、日本と各国各王朝の資料がある。これらを王朝ごとに集計すると、北宋銭や明朝銭が比較的多く得られていることは周知のとおりである。しかし、これを銭種ごとに集計した場合、首里城跡において最も多く得られている銭種は洪武通寶であり、その次に無文銭、永樂通寶、寛永通寶の順であることが表1からうかがえる。

最多の出土例を見せる洪武通寶は、各地区とも約20点以下の点数が確認されているわけだが、綾門大道跡、歓会門跡・久慶門跡、周辺遺跡の天界寺跡などにおいては20～40点が得られており、下之御庭跡・用物座跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡の調査では50点もの洪武通寶が出土している。また、同じ明銭である永樂通寶については、多くの地区において洪武通寶より出土量が少なく、10点未満の確認にとどまる。しかし、下之御庭跡他からは95点と洪武通寶より多く出土しており、注目すべき点

表 1-1 首里城跡出土銭貨集計表

	初鋳年	国	御庭	奉神門	下之御庭 他	継世門	右掖門	上の毛	管理用道路	城郭南側下	城の下	綾門大道	東のアザナ	南殿	歓会門久慶門	円覚寺	天界寺	合計
半両																	1	1
貨泉	14	新			1												1	2
五銖	24	後漢			1												1	2
開元通寶	621	唐		2	1	2	2	1	2	3	2	3	3	14?	19	1	4	59
乾元重寶	758	唐								1			1?				1	3
太平通寶	976	北宋								1	1		1	1	4		1	9
淳化元寶	990	北宋									2		1	1	3?			7
至道元寶	995	北宋	1	1	1					2			3	1	2		1	12
咸平元寶	998	北宋			1					2	1?				6?		3	13
景德元寶	1004	北宋			1	1			1				3	1	9		2	18
祥符元寶	1009	北宋			1						1			2?				4
祥符通寶	1009	北宋			1								1					2
天禧通寶	1017	北宋								2				1				3
天聖元寶	1023	北宋			1		1	1		2	1		1	2	8		2	19
景祐元寶	1034	北宋		1?					2	1				1	1			6
皇宋通寶	1038	北宋		2	2			1		6	4	1	8	3			2	29
至和通寶	1054	北宋															1	1
至和元寶	1054	北宋		1	1													2
嘉祐通寶	1056	北宋										1				1	2	4
嘉祐元寶	1056	北宋															1	1
治平元寶	1064	北宋			1		1			1	1			1				5
治平通寶	1064	北宋											1 ?					1
熙寧元寶	1068	北宋			1				1	2	4		4	1	12?	2	5	32
熙寧重寶	1071	北宋		1							1(大1)						2	4
元豐通寶	1078	北宋		1	2	1		1		4(大2)		1	2	2	15		8	37
元祐通寶	1086	北宋		3(大1)	2	1		1		1		1		2	9		6	26
紹聖元寶	1094	北宋			1		3				1			1(大1)		1	3(大1)	10
元符通寶	1098	北宋									1						1	2
聖宋元寶	1101	北宋					1			5		1	2	1			2	12
崇寧重寶	1103	北宋								1				1(大1)			1(大1)	3
大觀通寶	1107	北宋					1			2				1	7?		2	13
政和通寶	1111	北宋		1	2				1	1	1	1	6(大1)	1	9		3	26
宣和通寶	1119	北宋															1	1
宣和元寶	1119	北宋													2		1	3
北宋銭不明				3						3	2?			51			7	66
淳熙元寶	1174	南宋					1(大1)										1	2
慶元通寶	1195	南宋															1	1
嘉定通寶	1208	南宋											1					1
紹定通寶	1228	南宋														1		1
端平元寶	1234	南宋											1					1
咸淳元寶	1265	南宋									1			1				2
南宋銭不明											1 ?							1
正隆元寶	1157	金			1													1
至大通寶	1310	元									1				1			2
大中通寶	1361	明			1													1

表 1-2 首里城跡出土銭貨集計表

	初 年	国	御庭	奉神門	下之御 庭 他	繼世門	右掖門	上の毛	管理用 道路	城郭 南側下	城の下	綾門 大道	東の アザナ	南殿	飲会門 久慶門	円覚寺	天界寺	合計
洪武通寶	1368	明		3	50	1	2		3	18	4	22	14	3	39	1	57	217
永樂通寶	1408	明		3	95	1	2			4	2	1	7	1	16	1	13	146
嘉靖通寶	1527	明									1							1
明銭不明														19				19
康熙通寶	1662	清															1	1
乾隆通寶	1736	清		1	1	1		1		1			1	1		1		8
道光通寶	1821	清			1	1			1							1		4
清銭不明					1													1
中国銭不明				1							9	1	1				18	30
朝鮮通寶	1423	朝鮮											1					1
大世通寶	1454	琉球			6									1				7
世高通寶	1461	琉球			1								1					2
金圓世寶	1470	琉球															1?	1
琉球銭														10?				10
加治木洪武									1							1		2
長崎元豊						1												1
叶手元祐												1						1
古寛永	1636	江戸		1	1	2	3	1	2	22	3	1		1		8	1	46
文銭	1668	江戸			1	1		2	1	2	1					1	1	10
新寛永	1697	江戸		2 ?	1	4	3	2	6	17	5	4	1			8	11	64
長崎寛永									1									1
寛永一文鉄銭	1739	江戸								3							1	4
寛永銅貨																1		1
天保通寶	1835	江戸								1								1
江戸不明														6				6
雁首銭				1 ?	1			2				1					1	6
無文銭				2	2	2	4	3	7	34	19	4	63	4	12	21	108	285
香港一千						1												1
半銭				2		1				3					1	1	1	9
一銭				1		2	銅貨 1			6	2			2	2	18		34
五銭										1	1					1	1	4
十銭																1	1	2
五十銭							銀貨 1											1
10円						1										3	1	5
1セント											1			2		1	1	5
5セント										1								1
昭和?														4				4
不明						4	5		7	189	3		67	317		23	64	679

※ (大) は大銭

であるものの、残念ながら地区ごとの集計表が提示されていないため、詳細を把握することはできない。無文銭に関しては、東のアザナ跡や城郭南側下地区、城の下地区、円覚寺跡、天界寺跡など主要施設からは若干離れた地区や城郭外からの検出が目立つ。寛永通寶も同様に、城郭南側下地区で他の地区と比して多めに出土していることが分かる。

この首里城跡の銭貨構成は、山北王の居城であった今帰仁城跡とも似た構成をなしている。すなわち、今帰仁城跡においても北宋銭が206点と比較的多く確認されているものの、銭種別では洪武通寶(181点)が最も多く、永樂通寶(155点)、無文銭(75点)や寛永通寶(31点)などがそれに続いている。それを表2のグラフでみると、北宋銭と洪武通寶の差は大きく開いておらず、また、永樂通寶も全体の約2割となっている。このように、今帰仁城跡などにおいても洪武通寶および永樂通寶を中心とした明朝銭と北宋銭の出土量に大差がないことが理解できる。

では、近世の首里城跡における銭種構成はどうであろうか。近世に移ると、寛永通寶やその同時期である無文銭(知念2004)などが台頭するようになり、県内においてもそれらが主体となって普及した。首里城跡などから出土する資料をみても、寛永通寶は120点以上、無文銭は220点余りが確認されている。しかし、首里城跡以外でも寛永通寶や無文銭が多く出土する遺跡が古墓や拝所などの祭祀遺跡である。その状況が顕著に表れている遺跡の一つに銘苅古墓群がある。銘苅古墓群では、グスク時代以前に鑄造されたと考えられる銭貨が確認されておらず、寛永通寶123点をはじめ、近世以降の銭貨が得られている。その割合は、寛永通寶が全体の4割以上を占めている。

これには、中世～近世における本土の墓の6枚の銭貨を副葬品とする六道銭の習慣があり(鈴木1999)、当時の沖縄の人々も六道銭の習慣を認識していたと考えることもできる。

以上、首里城跡など代表的な遺跡の銭種構成を大まかに比較した結果、洪武通寶が永樂通寶より多めに得られており、また、北宋銭と洪武通寶の出土量についても、そんなに大きな差はなかった。さらに、近世には日本からの影響を受けることで、清朝銭より寛永通寶の方が圧倒的多数の点数を占めていることが改めて把握できた。

3. 近年の模鑄銭および古銭学の研究から一模鑄銭抽出ー

出土銭貨をみていく上で、注意しなければならないのが、鑄造年代に関することである。資料の銭文が明瞭であるからといって、その初鑄年が出土地点の年代にはならないことは周知のとおりである。その理由はいくつか挙げられるが、各地で模鑄銭などが大量に鑄造されていたことも一つの理由である。

そこで今回は、首里城跡の出土銭貨の中で模鑄銭と思われる資料が改めて確認できたため、古銭学の研究成果を引用して、加治木銭や長崎貿易銭などの特徴(古田2002)を紹介し、首里城跡各地区の資料から模鑄銭と思われる銭貨を抽出していく。

加治木銭は鹿児島県の加治木で鑄造され、背に「加」「治」「木」のいずれかの文字がはめ込まれた銭貨や天下手祥符(註1)をのぞく加刀鐐(註2)または改造鐐(註3)と称される鐐銭が加治木銭と考えられているようである。ようするに、鐐銭製作段階の各銭文の誤字などが目立つものである。また、長崎貿易銭は日本国内の銅銭減少に伴い、1660年頃から1685年頃まで長崎中島銭座において海外輸出用として鑄造されていた銭貨で、「寶」の目の部分が比較的小さかったり、孔径が大きいなどの特徴がある。以下に首里城跡から出土した模鑄銭と思われる資料をみていく。

図2-1は不明瞭ながらも背上に「治」が確認できる加治木銭の洪武通寶である。2は銭文が小さく、「洪」の1画目と2画目の間隔が広がっている加治木銭の洪武通寶である。3は皇宋通寶であ

るが、「皇」の白の部分が丸みを帯びて左右に広がる加治木銭である。4は楷書体の元豊通寶であるが、本銭には楷書体がないことや「豊」が「元」比べて狭いことから輸出用の長崎貿易銭であると考えられる。5は非常に不明瞭ではあるが、背上に「長」をもつ寛永通寶であることから長崎貿易銭であると思われる。

4. おわりに

これまで主に首里城跡の出土銭貨について述べてきた。銭種構成に関しては、これまで刊行されてきた各地区の報告書を基に改めて作成したが、洪武通寶や永樂通寶をはじめとした明朝銭の出土量が多く、その点数は北宋銭のそれをも凌ぐほどである。また、無文銭についても寛永通寶より100点近くも多く得られており、今帰仁城跡においてもこれらと似た結果が把握できた。このことは、北宋銭が最も多く、次に寛永通寶、明朝銭の順に続くとする従来の見解とは異なり、各遺跡の銭種構成を改めて数量的に検討する必要があると考える。

また、今回は古銭学の研究成果を引用して模鑄銭の分類も試みた。しかしながら、筆者の未熟さと怠慢から首里城跡出土の資料をすべての確認することができず、模鑄銭の抽出も加治木銭と長崎貿易銭のみにとどまってしまった。ただ、出土銭貨の中で模鑄銭を意識して取り上げることが少なく、その点においては今後の沖縄における出土銭貨の研究に一石を投じるものと考ええる。今後も資料の見直しを注意深く行い、模鑄銭の分類についても各分野とリンクさせて検討していく必要がある。

本稿をまとめるにあたって、瀬戸哲也氏には様々なご協力およびご助言を頂いた。末尾となりましたが、記して感謝を申し上げます。

(ながはま たつき：調査課 臨時的任用専門員)

<註>

註1. 祥符通寶の模鑄銭で、背に「天下」と逆さまに記されたもの、面および背に「十」記号が鑄込まれたもの、色調や大きさに共通性がみられるものなどを称す。

註2. 母銭の銭文を一部削り、修正をして鑄造したと考えられる模鑄銭。

註3. 中国銭を模倣して、新たに母銭を作って鑄造したと考えられる模鑄銭。

引用・参考文献

沖縄県教育委員会 1998『首里城跡－御庭跡・奉神門跡遺構調査報告－』沖縄県文化財調査報告書 第133集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第3集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『首里城跡－継世門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第9集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第14集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－上の毛及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第27集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第1集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文

化財調査報告書 第19集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城跡ー城の下地区発掘調査報告書ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第18集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 『綾門大道ー首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第13集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城跡ー東のアザナ地区発掘調査報告書ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第20集

沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡ー南殿・北殿跡遺構調査報告書ー』 沖縄県文化財調査報告書 第120集

沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡ー歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査ー』 沖縄県文化財調査報告書 第88集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡ー遺構確認調査報告書ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第10集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『天界寺跡（Ⅰ）ー首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第2集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『天界寺跡（Ⅱ）ー首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第8集

鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会

知念隆博 2004 「清朝銭について」 『沖縄埋文研究』 第2号 沖縄県立埋蔵文化財センター

今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』 今帰仁村文化財調査報告書 第9集

今帰仁村教育委員会 1991 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』 今帰仁村文化財調査報告書 第14集

那覇市教育委員会 1999 『天界寺跡ー首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告ー』 那覇市文化財調査報告書 第42集

那覇市教育委員会 2000 『天界寺跡ー首里公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告ー』 那覇市文化財調査報告書 第43集

那覇市教育委員会 1998 『銘苅古墓群（Ⅰ）ー那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅴー』 那覇市文化財調査報告書 第39集

那覇市教育委員会 1999 『銘苅古墓群（Ⅱ）ー那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅵー』 那覇市文化財調査報告書 第40集

那覇市教育委員会 2001 『銘苅古墓群（Ⅲ）ー那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅸー』 那覇市文化財調査報告書 第50集

那覇市教育委員会 2004 『銘苅古墓群（Ⅳ）ー那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅺー 一天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳー』 那覇市文化財調査報告書 第59集

古田修久 2002 「中世から近世前期の九州・沖縄の銭貨ー古銭学的観点からの分類ー」 『九州・沖縄における中世貨幣の生産と流通』 1999～2001年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

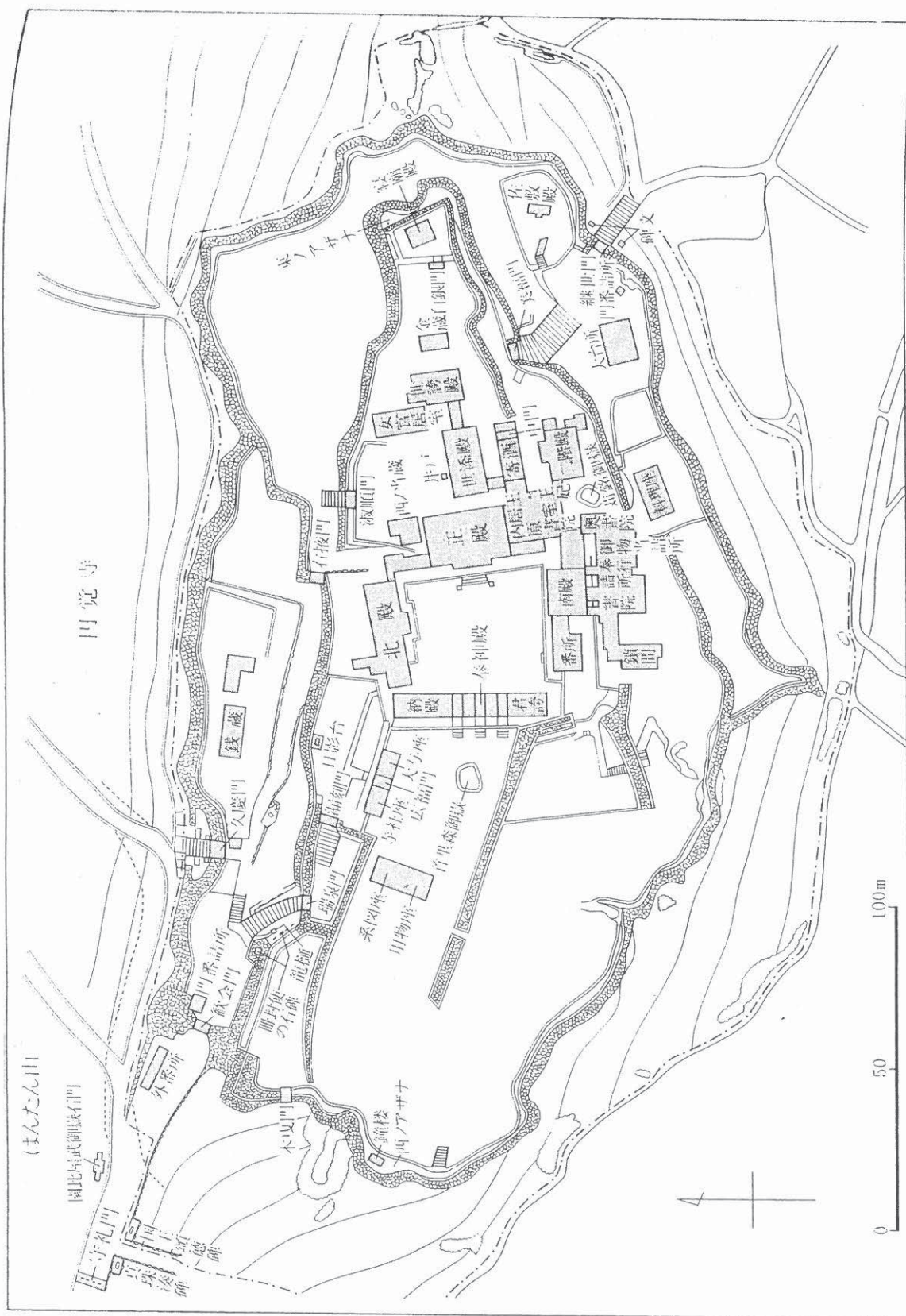
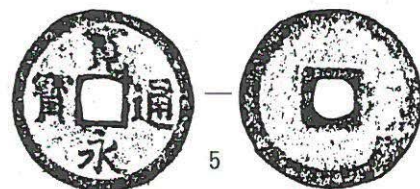
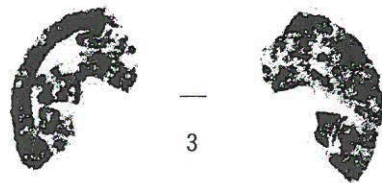
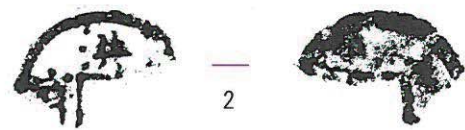
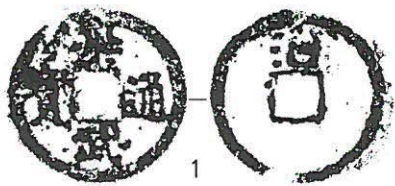
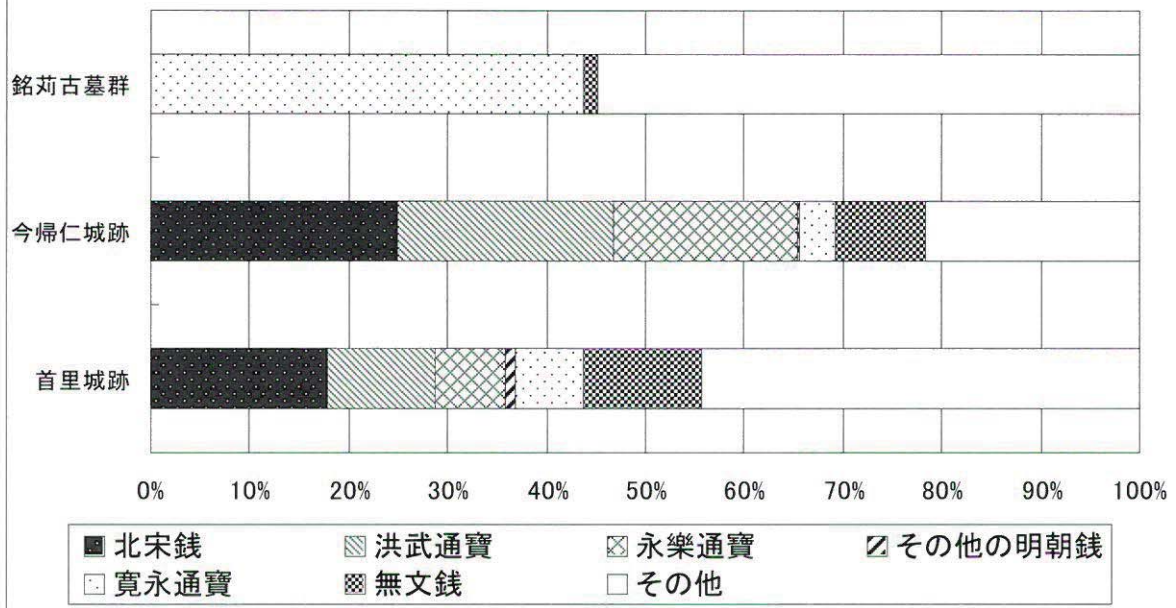


図1 首里城平面図

表2 各遺跡銭種構成



1 加治木銭（円覚寺跡）、2 加治木銭（城郭南側下地区）、3 加治木銭（城郭南側下地区）、
4 長崎貿易銭（継世門周辺地区）、5 長崎貿易銭（管理用道路地区）

図2 銭貨拓影（S=1/1）